

浄土

1978-6

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雑誌) 第三二五号
昭和五十三年 五月二十五日印刷 昭和五十三年六月一日発行
第四十四卷 第六号



根 性



根性とは、日本国語大辞典によると、苦しみや激しい訓練に耐え、へこたれないで事を成しとげようとする強い気力をいうと書いてある。この頃よく若い人達のことを、体格はよくなったが体力がないと言うのは根性がないうということである。またスポーツ選手などを評価する場合、よく根性という言葉がつかわれる。

最近根性をみせられた例として、本年大正大学国文科に入学した女子の卓球選手をあげたい。この選手は超高校級の選手で、高校時代、日本代表として中国遠征もし、全国的に名をとどろかした選手である。生まれは北海道であるが、卓球のため青森県の高校に来ており、その高校も彼女の力で去年全国優勝をしている。チームの主将として、団体戦に、そして個人戦に大活躍であった。このまま努力をつづければ、世界選手権の日本代表にもなれる選手である。大正大学卓球部としても待ちに待った大物選手であった。その選手が実は腎臓が先天的に弱いのである。大正大学

入学と同時に、東京虎の門病院で検査を受けた。先生が診断の結果、「こんな重病人がよく選手生活をしていたものだ」と言われる程の重病であった。「まず気力だけでやっていたのではないか。とても常識では考えられない」と言うことであつた。入院中も先生に止められるまで、ベットの中でラケットを振っていたそうである。その根性には先生方も驚いていた。しかし検査の結果は、「もう一生、卓球をやつてはいけない」という診断がくだつた。本人は、「命をちぢめても卓球をやりたい」と言つた。しかしながら、塩分を健康な人の半分しかとつてはいけない体では、汗をかくスポーツは無理であるので、やむなく止めさせたわけである。

このように根性はあつても、ドクターストップがかかる選手もいるのである。健康な体をもったものは、それだけで感謝しなければならぬ。スポーツにかぎらず、体の丈夫な人はともかく気力をもつて仕事にあたつて欲しい。ノイローゼ等の心の病はふきとんでしまふと思う。

(佐藤行信)

六月号



一向専修ノ念仏ニ信ヲイタ
シテ、他ノココロナク、日
夜朝暮、行住坐臥ニ、オコ
タルコトナク称念スヘキ也
——『念仏大意』

目次

法話

娘よ強く生きよ……………川 端 大 祐……(2)

＜童話＞タンポポの国へ……………布 村 哲 哉……(6)

＜ふるさと紀行＞只ひたすらに……………榎 本 性 音……(24)

自然を考える③＜教育と自然＞

真の教育者をめざして……………藤 原 弘 道 ……(10)

いのちを大切に……………上 田 祐 規 ……(14)

教育と自然環境……………安 居 總 子 ……(18)

法然上人の弟子たち②

宇都宮一族のこと〔二〕……………梶 村 昇……(29)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(36)

＜読者の便り＞輝く島スリランカ……………磯 貝 基 教……(34)

＜表紙裏・巻頭言＞根性……………佐 藤 行 信

念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



娘よ強く生きよ

川端大祐 かわばた だいゆう

(新潟教区教区長)
(小千谷市照専寺住職)

「死ぬ時は嫁に面倒を見てもらわにゃならんからのう」と嫌な嫁でも気兼ねせねばならぬという姑が多い。

古来嫁と姑のトラブルは、日本社会の代表的な家庭争議である。

娘には資産を傾けても、豪華な嫁入り道具を持たせてやるが、嫁には一枚の浴衣を買うにも幾日も考える姑もある世の中である。

娘可愛は人情であるが、嫁の憎いのは何故であろうか。

大事な息子を嫁にさらわれて、やがて財産まで取られると思うからであろうか。

人間の慾には際限がないから、どんな立派な嫁でも満足ということがないのであろう。

容姿も知能も美、家柄、わが家に比べて、すべて勝つていても、不満とひがみが交錯して、不和の感情をかもすのかもしれない。

世の嫁と姑の美談、トラブルさまざま聞いたが、自分の娘がいよいよ舅、姑につかえることになってみると、対岸の火事を見ているようなわけにはいかない。

末娘が岐阜市に嫁いだのが一昨年の暮であった。僅かな荷物でも、木曾路を越えるか、三国の山越えて東名高速を廻るか、あわただしい婚礼の仕度であった。

気候はよくても人情はわからない。風俗習慣は何一つ通ずるものはない。東京の学校が近くで、下宿も近く、喫茶店でよく顔が合った。彼の家がブルースで有名な柳ヶ瀬だということとで親近感をもった位のものである。

会ってみれば温和で常識的で、専門の歯科以外の教養の方がむしろ深いと感じとった。

親達は、この話の決まる前にわが町や、遠く親の故郷の島の実家まで調査し終っていた。

わがままで、気の小さい娘であるが兄や姉に甘えて育ったせいか、我^がをとおし、理くつつばい性格であるのが親の苦痛の種である。

一年が夢の様に過ぎて、忘れていた頃になってお産の里帰りの通知である。それも冬のさ中である。

恋愛結婚なのだし、南の温暖な国から、はるばる海山越えて豪雪の山国まで苦しみに来ることもなかりうと父親は思う。

しかし母親ともなれば娘を想う心は、また格別なものがある。

万葉の歌人が

旅人の宿りせむ野に 霜ふらば

吾が子羽ぐくめ 天の鶴群^{たすけり}”

と詠んだ心が、ひしひしと胸を打つのである。霜どころではない。日本有数の雪地獄の中へ、吾が娘、初孫を送る親の心境が痛いほどよく解り、舅、姑が天の鶴群とな

ってこの嫁を守ってやらねばならぬと、愛情が湧きたってくるのである。

地球は狭くなり、北海道から沖縄まで、数千キロあったとしても、飛行機の旅は半日もかからない。若い世代の外国旅行は近ごろすさまじいブームとなっていることを思えば、越後も土佐も、薩摩の果ても隣なのである。

内孫^{うちまご}が生れて十カ月経った本年二月始めに、同じ女兒が誕生した。男親^{おとこおや}にそっくりだとよろこび、「おぢいちゃんに似て困ったわ」と婆さんは笑ったりする。

祖父に似ず美人の相だとの大方の評のようで、まずまず安堵している。

ところが、雪が降って降り込められた寒も明け、彼岸雪も、やがて消え、五月の青葉の候となった、この頃になって、急に娘は婚家へ帰らないと言い出したのである。

まさに晴天の霹靂^{へきれき}であった。

二カ月経った頃から、「立派なお子さんだこと、いつお帰りですか」と訪れる人々に愛想をいわれていたのが、真剣に帰宅を拒む心境と、困った現実に老いた父母

は世間態もあり、生れた子の不幸な将来が想いやられて悲しくなるのであった。

ちっと耐えていた娘の心境が不憫でもあった。始めは、また始った我がまま娘の不埒な行為に腹が立ち、幼稚な姑ぎらいの抗弁に藉す耳は持たなかったのであるが、山を越えた太平洋の岸辺の国で風俗習慣がこの娘には絶対に合はなかったのだと哀れに思うようになった。

姑は親しさを現わすためにわざと乱暴な言葉をつかうのに、どぎもをぬかれ、別居ではあっても殆ど毎日日参することゝ嫁姑の親しみを増そうとしたり、嫁に來たからには所有権は同じだと虎の子にしている筆筒を無断で動かしたとか。姑の命令に夫が易々と従って一緒になつて嫁いじめに加担するとか。女の細い神経を逆なでする数々の一年有余の仕打を並べたてて泣きじゃくるのであった。

淋しがりやの娘であつた。この娘が遠く離れた異国に嫁する結果についての不安を、私は敢て日本が狭いと絶叫し世の姑等に「天の鶴群」となつて保護してもらいたいと祈つたのであるが、か弱い一人の旅人さえも、助けてくれる鶴はいなかったのであろうか。

私たちの教育が悪かつたのであろう。心をごまかすことのできないこの娘は、人に愛されるすべを知らないのである。

いくらなだめ、すかしても、かたくなに閉す心は帰宅に開こうとはしないのである。怒り狂つて迎えに來てくれた姑にさえも会おうともしないわが娘の偏屈さに、煮えくりかえる怒りさえ覚えるのであった。

怒りが心頭にきた時、込み上げる悲しみが、そくそくと胸を打って涙が落ちそうになるのであった。

「罪人なりとても疑うべからず……」と広い心で受けとめて下さるみ仏の心を心として、この娘を助けねばならないと固い決意が走る。

姑をおいて、夜になつても帰らない若い母。育児と姑への怨念でノイローゼになつたのかもしれない。嬰兒を置いて身をかくした不幸の母親を想う。「うけ難き人身をうけ」ながら若い命を断つとは何事であらうか。いやしくも仏家に生れて、父の日ごろの勤めを目のあたりにしながら、不孝な娘は十惡五逆の者にもひとしいと口説きながら、哀れをとどめ胸がうずくのである。

夜は次第に更ける。心あたりをあちこち電話するが、

若い子持ちの母が深夜他所を訪れ音沙汰なしとは言語同断である、苦しまぎれに妻をなじって見るが埒もないことであつた。夜も更けた頃、境内に車の音がして止まつた。娘はお茶の先輩につれられて帰宅した。

妻は涙を流して娘を叱り、先輩に感謝するのであつた。叱るより嬉びで胸が一杯なのである。

類は友を呼ぶという。この先輩の赤塚夫人は賢夫人の誉高い婦人であるが、若い頃から舅との闘いに苦年の幾年かを明け暮れた人であつた。その苦勞話が、いつか娘の心に潜在したのであらう。苦しい胸の内を打ち明けられる者は母でもなく、まして一方的押しつけ主義の父親でもなく、それは同病の信頼感であつた。

更けゆく夜を二人は語り明したのである。赤塚夫人も自らの経験から強く説いてはくれたが、生理的に嫌悪感を持つ彼女には、この一年間の生活記録の隅々に口惜しい思い出の数々が鮮明に浮び上がるだけであつた。

結婚式が年の瀬であり、新郎がまだ国家試験の前であるとの理由で、新婚旅行を姑は抑えて伊勢参りに限ったこと。それなのに先月結婚した自分の娘はヨーロッパに旅立ったとか。

婚礼の仕度が貧弱だとか、寺は貰い物で食っていると。いつ、どんな時に言葉の端に出たのか分らぬ様な些細な事例が、彼女の耳朶にささやかれるのであつた。

一々話にもならない小さな言の葉や動作が遠く離れて四面楚歌、孤独の身に慕い寄るホームシックが彼女を蝕み、産後のノイローゼに昂じていったのである。

この娘の結婚生活が破綻し、事故にでもつながつたら、この父親の名誉は一体どんなことになるだらうか。私は始めはこの苦しみと恐怖にさいなまれた。浅ましいことであつた。仏に仕え、仏に生かされる身であるとして認しながら、われさえ生きれば吾が子を犠牲にしてもかまわぬような心境となる凡夫の心丸出しであつた。

早、里帰り五カ月、孫も生れて三カ月目に入り、世間の眼も奇異に輝き始めると、彼女も外出を控えるようになり、自然に毎日常に引きこもり、うっとおしい気分になるであらう。うつうつと楽しまない。温い言葉をかけてやりたいと思うが、淋しそうな彼女をみると「風邪引くな」「赤ちゃん今日はウンチしたか」と言う様な平凡でわれながらおかしい言葉しか敢て掛けられないのである。

タンポポの国へ

ぬの
むら
てつ
や
布村哲哉

道ばたにタンポポが一本咲いておりました。コンクリートの間から、やっところ、さっところ身をくねらせて、それでもしっかりと立っているのです。

それを見た人は「よくもまああんなところに生えていられるものだ」と感心して眺めるのでありました。

ふみつけられそうになりながらも、どうやら黄色い花をつけたタンポポは、電線にツバメのくるころ、もう白くて丸い綿の帽子をかぶりました。

タネになって、空へ飛んで行く日をまっているのです。

そんな、かわいい、わた菓子のようなタネの中に、大きいタネと中ぐらいのタネと、小さいタネが手をつないで、ならんでいます。

大きいタネがうれしそうにいました。

「ぼくは、こんどこそ広くてあたたかい野原へ飛んで行くんだ。ポカポカお日さまの下で大きくなるんだ。蝶も、あそびにくるだろう。」

それを聞いた、中ぐらいのタネが、

「だめだめ、そんなにうまくいかないよ。きつと道路におちて、じどうしゃにふみつぶされてしまうだろう。」

と、いいましたので大きいタネはおこって、

「じゃ、きみは一体、どこへ行くんだい。」

と、たずねました。

「ぼくは、こんなにうるさくて、きたない地球なんていやだね。ロケットに乗って、ずどーんと、星の世界へ行って、タンポポばかりの、きれいな国をつくるんだ。」中ぐらいのタネが、高い空を見上げながらげんきにいました。

大きいタネが、またいます。

「そんなことができるものか。ロケットはものすごく早
いんだぞ。しがみついていたって、たちまちふりおとさ
れてしまふだろうよ。」

と、わらいました。

それでも、中ぐらいのタネは

「いや、どうしても星の国へ行つて咲くんだ。だって、
ぼくたちタンポポは、ほそくて、ふわふわ軽くても、ど
こへでも飛んで行けるんだ。ぼくはきみみたいによわ虫
じゃないぞ。」

よわ虫と、いわれた大きいタネはおこつて、中ぐらい
のタネの頭をゴシゴシと、おしました。中ぐらいのタネ
も、まけずにゴリゴリ。

せつかく、きれいに並んでいたタネたちは、ゴシゴ
シ、ゴリゴリゆれたので、まだ「さよなら」したくない
タネが、下へおちてしまいました。

それを見ていた、小さなタネがいます。

「ほらほら、けんかなんかしてはだめだよ。ほかのタネ
がかわいそう。みんな仲よく、大きくなっていちにいさ
んと飛び立つんだよ。それまで、じつとがまんするのが

タンポポのタネなんだから。」

そう言われた、大きいタネと、中ぐらいのタネは、け
んかをやめて、こんどは小さいタネにききました。

「そんな、なまいきたことをいう、きみはどこへ行くつ
もりなんだい。」

小さいタネは、はずかしそうに、小さい声でいいまし
た。

「ぼくは小さくて力がないから、風さんといっしょに、
タンポポの国へ行きます。」

「なんだって、タンポポの国だって。そんな国なんか、
あるものか。」

大きいタネがいますと、中ぐらいのタネもいいま
す。

「そうだよ、風といっしょじゃ、どこへ行くかもわから
ないじゃないか。」

小さいタネは、だまってしまいました。

いよいよ、タネたちの別れのとかがやってきました。

タンポポの、丸く白い帽子の上にお日さまが、テカテ

カ照りました。

風が、ビュー、ビューふいて、雨が、ザーザーふりました。

そばをじどうしゃが、ビュンビュン通り、犬が、ノソノソ歩きます。

そのたびに、仲間のタネがつぎつぎと、"さよなら、さよなら"、飛んで行きます。

そのとき、こどもが、タンポポをみつけて、

「そらそら、とんで行け、とんで行け、ぶー。」

と、ふきましたので、大きいタネは

「それでは、お先に、広くてあたたかい野原へまっすぐに。」

と、飛び上がりました。

「いよいよ、こんどは、ぼくが星の世界へ行く番だ。ゴオーッと、でかい風がふいてくれ。」

中ぐらいのタネが、そういったとき、ブウーンという羽音がして、一びきのハエが飛んできて、タンポポにとまりました。

「よーし、ハエのロケットだ。五、四、三、二、一、〇、発射、ブウーン。」

ハエの足につかまった。中ぐらいのタネは、げんきよく飛び立ちました。

とうとう残ったのは、小さいタネが、一つ。

そこへ、そよそよとやさしい風がやってきていいました。

「さあ、あなたのすきな国へ行きましょう。わたしの手におのりなさい。」

小さなタネを、そっと乗せた風は、ゆっくりと空へ舞い上がりました。

「わあー、よく飛ぶ。ぼくは、小さなヘリコプター、クルクル、クルクルUFO。」

小さいタネは、風といっしょに、たのしく飛びまわって、あそびました。

でも、気になるのは、先に飛んで行った、大きいタネと、中ぐらいのタネのことです。

「広い野原へ行ったかな、星の世界へ行っただろうか。風さん、おねがいです。ぼくといっしょに友だちのタネをさがしてくださいな。」

風が、力強く、サアーツとふいて、小さいタネを、空高く、とばしてくれました。

「大きいタネさん、どこですか。」

小さいタネが、よびますと

「ここだよ。」

広い野原を見ましたが、いません。

「ここだよ、ここだよ。」

という、声のする方へ行きますとそれは、病院のベランダにおいてある植木鉢の中でありました。

「広い、原っぱじゃなくて、こんなせまいところさ。」

大きいタネは、泣きそうな声でいいました。

小さいタネが、なぐめていいいます。

「どんなに、せまいところでも、あたたかい花をさかせてくださいな。そうすれば、病気のこどもがよろこんでくれますよ。」

「ありがとう。きっと、あたたかい花をね。」

大きいタネは、明るくいいました。

風がふいて、小さいタネは、また、舞い上ります。

「中ぐらいのタネさん、どこですか。」

小さいタネがよびますと、

「ここだよ。」

高い空の星を、見上げましたが、そっちの方では、あ

りません。

「ここだよ、ここだよ。」

声のする方へとんで行きますと、そこは地面をほったゴミのための中でありました。

「ロケットに乗って星の国へ行くつもりだったけれど、ハエが、こんなところへきてしまったんでね。」

中ぐらいのタネは、はずかしそうにいいました。

小さいタネがはげますようにいいます。

「いえいえ、どんなに、きたないところでも、きれいな花をさかせてくださいな。虫たちがみんなであそびにきてくれますよ。」

「ありがとう。きっと、きれいな花をね。」

中ぐらいのタネは、元気を出していいました。

ザアーッと、風が吹きすぎると、小さいタネは青い空を、また、どこまでも飛びつづけるのでありました。

タンポポの国へ向って。

(おわり)

自然を考える

(三)

— 教育と自然 —

真の教育者をめざして

— 自然の風情に恵まれて

京都東山山麓の古刹南禅寺と永観堂との間に位置し、山紫水明の美しい自然環境に恵まれた東山学園に、わたくしは、教職に身を奉ずること三十九年に及んだが、この春、後進に道を開く意味で退任した。その間、校長職二十八年の長きにわたったが、春夏秋冬、それぞれに花、緑、楓、雪と移り変わる東山一帯



藤^{ふじ}原^{わら}弘^{こう}道^{どう}

(東山学園名誉学園長)

の風情に慰められて、光陰矢の如く夢のように過ぎ去った。その間、学園紛争という教育界未曾有の出来事が全国的にひろがったが、幸い東山学園には起らずにすんだ。しかしその当時の心痛は一入であった。何分にも二千名に及ぶ中・高校生と、四百名の園児をかかえた学園であるから、必ずしも平凡な日々ではなく、今なお記憶に残っているような面倒なことは一雨ならず出会った。それでも自然

が誇る美しさに包まれ、歴史的風土のなかで、それらが語りかける声なき声を聞くことによって慰められ、勇気づけられて大過なく任を果し得たことに感謝している。これも偏に仏天の加護である、合掌を忘れたことはない。あまり強健でもないわたくしが、殆んど病欠もなく勤務できたのは、この自然の恵みであると思っている。大都会の高層ビルの谷間に縁一つない学園に勤めていたのでは、とてもかく長く勤続できなかったであろうと述懐するとともに、喜びに堪えない次第である。

——無味乾燥な新設学舎

新しく開発された新興住宅地では、まず保育園や幼稚園が建ち、ついで小・中・高校と、いうように次第に教育施設が建てられる。過密人口の大都会では、コンクリート造りのマツチ箱のような学校の新設が多く、たとえ施

設設備が近代化され、整っていても、その周囲の環境はまことに殺風景で、無味乾燥なのが多い。

わたくしは私学審議会の委員として、私立学校が新設されるたびごとに実地視察にでかけた。その際、必ずといってよい程、早く植樹するように勧めている。とはいっても一本の苗木とて、一朝一夕に成長するわけではなく、相当の年数を重ねなければならない。学校に学ぶ生徒たちが自然のなかで伸び伸びと成長し、自然と対話ができるような教育環境を持ちたいと思うわたくしの心は、実のところ、東山学園をとりまく自然環境から教えられ、学びとったわけである。

——心の開発をめざす教育

戦後の日本は物資不足に悩まされ、大いに苦しんだ。ともかく物をつくることに全力が注がれるに至った。その結果、今日わが国は

世界の経済大国にまで発展した。しかるに円高不況で倒産があい続き、四苦八苦の世相である。物は豊かにでまわったが、一方人びとの心はますますささんできた。精神を高めることを忘れたことにやっと気づいたが、時既に遅しの憾を深くする。

教育界は今や一般社会の風潮となんら変りなく、対立による抗争、混乱があいついで起り、生徒の兇悪な犯罪が跡を絶たない始末である。なかでも中学生の殺傷事件が多くなつたことに心を寒くする。肉体には栄養を与えて肥えさすことができたが、今となつては飢えた心に栄養を与えよという声が次第にたかまってきた。現代は心の時代だ、と言われる所以もその辺にある。勿論人間生活の向上は、衣食住が適度に満たされねばならないが、それらの物と同時に心も満たさなければならぬ。いわゆる物心一如の教育が期待される。

孟子は「学問の道は他なし、その放心を求

むるのみ」(『孟子』告子上)といっているが、失われた心、すらわち生来の良心を求めることをもって学問であると教えている。仏教でいうなれば心田を耕すこと、仏性を開発することである。そういった点に留意し、心を育てることに主眼を置いた教育をめざしたい。すさんだ心はすぐさま豊かになり、うるおうことが容易でない。道義を重んじ、人に迷惑をかけることを極力避けることから出発し、相手の身になつてものごとを処理できる心のゆとりを持った人材にまで、たかめてゆきたいと思う。心の奥ゆきを深めるべく教育者は心すべきでなからうか。

— 宗教情操教育

近ごろ真の日本人らしい人が少なくなってきたのが目につく。男性らしい男、女性らしい女が少なくなったことに一抹の淋しさを覚える。この「らしさ」はただ男女別だけに限つ

たことでない。それらしい動作、行動、それらしい心遣いもできない。ということまでろがっている。

観光都市京都には、年間、なんと四千万人の観光客が殺到するという。京都は日本人の心のふるさとであると言われるが英国が生んだ偉大な歴史学者である故トウインビー博士は、「世界人の魂のふるさとである」と絶讃したことがあった。その心のふるさとと言われる京都の魂を代表するのは、なんといっても神社仏閣であろう。その神社仏閣におしかける観光客は多いが、合掌して敬虔な気持ちで拜んでいる人はごく稀である。

よく考えてみると、掌をあわせて神仏を拜する教育は、公立の学校では一切行っていないのである。信仰の厚い家庭ならば朝に夕に一家うちそろって合掌することもあろうが、多くは掌をあわす経験が皆無であるといつてよい。神前の柏手と、仏前の合掌との区別すらできないのが現代人である。たとえ観光の

ために神社仏閣に詣でたとしても、柏手や合掌ができるように、家庭で躰たいものである。掌をあわすことをとおして、神仏の全きにたいして自らの愚かにして、有限なことを反省し、自分が今日あることの有難さを感じ、人として人界に生まれ、なにをなすべきかを思考せしめるべきでなかろうか。心の開発、心の奥ゆきを深めるには、そういった宗教情操教育をぬきにしては達成できないであろう。

——人格が触れあう教育

「孟母三遷の教え」（『列女伝』母儀）は人をつくる上に環境が果す役割の重大なことを伝えている。寺小屋教育が日本の科学の起りだとなれば、静寂に富む寺院を教育の場とした所以が察せられる。環境が整うということは教育の必須要件であるが、いかに完璧な施設設備を誇っていても、年とともに古くなり、より

よい施設設備によってかわれる運命を持っている。したがって教育の環境づくりもさることながら、教育にとってもっと本質的なものをしつかり行うことが必要なのではなからうか。不十分な教育環境ではあったが、立派な教育が行われた先例をあげることができる。松下村塾はその顕著な一つである。つまり人格と人格とが触れあう教育が必要なのである。教育はなんといっても、まず教育者自身が

いのちを大切に

菜の花や工場閉鎖せしままに

冒頭から愚作の披露で恐縮です。今日の不

みづからの心を洗い、不断の研鑽を怠らず、使命感をもって教え子を強く鍛える心構えが大切である。「自浄其意」、「真実報恩謝」の気持ちになりきって、心の貧困をなくするよう人格的な教育を行って欲しい。教育環境は言わば教育の縁でしかないのである。そうした縁も大事ではあるがそれにもまして、教育者自身が真の教育者としての人格の持ち主であることの方がより重大と言わざるを得ない。



上^{うえ}田^だ祐^{ゆう}規^き

(鎮西高等学校校長
真和中・高等学校校長)

況は根深く、改めて高度成長に酔い痴れた私どもの覚醒を促すに足るものを感じさせてくれます。先頃まで威勢よく操業していた工場

も遂に静まりかえり、ただ菜の花のみが黄と燃えて今を盛りと咲き匂っているのであります。私どもの学園では数年前から十数名の教師が、繁忙な校務の旁、寸暇を割いて句会を開いています。四季折々の風物を句に托してしばし清快のひとときを楽しんでいます。

人間の営みには栄枯盛衰があり、或は自らの不仕末、怠惰のために沈むもあり、或は自らの懸命の努力にも拘わらず、時勢の変転のために不運を託つのもあります。このように人為は時に挫折があります、自然は年々歳歳確実に私どもに迫て参ります。人は待ってくれますが、歲月、自然は非情にして待つてはくれません。天壤は無窮ですが人間は有限の身であります。この与えられた人身を如何ように費うかによって、人生の幸不幸は決定するのであります。私どもは人間として生まれてきたという結果から、開き直って、有難いという素直な感謝の念を忘れてしまいがちであります。なかには人間苦が厭で、自分を

生んでくれた親を恨んでみたり、大切な二度とない人生に、あっさりと別れを告げる人もいます。そういう人は他者には到底理解し難いような業苦の果に、自ら決断した可哀そうな境遇の人です。そうではあっても、受け難き人身に生を享けた有難さに徹することにより、尊い人生を全うしてもらいたいと念ずるものであります。

昨今、青少年の自殺が多いことは周知の事実であります。大人が生活に失敗したり、生活に疲れ果てて万策つきての自殺ならいざしらず、前途有為の青少年の自殺ほど痛ましいものはないのであります。戦前にもやはり子供の自殺がありました。私が小学校六年生の時でしたか、二級下の後輩が、父親に叱られて、「お前のような奴は死んでしまえ！」と言われ、「それなら死んでやれ」と言って、その足で汽車に飛び込んで、あっと言う間に死んでしまったことがあります。恐らく他に何らかの理由があったかも知れません。とて

もいやな想い出の一つであります。こういう事例が起るたびに識者の分析がよく新聞等に開陳されます。それらはみな正鵠を得た解説ではあります。然しながら、それはそれとして、静かに今日の世相を観るに、余りにも人間が大切に取扱われていないのではなからうかと思うのであります。物質文明の恩恵に全幅の信頼を置いて、私どもは知らず知らずのうちに、人間までが物と同じように取扱われてきつつあるのではないかと惧れるのであります。大人の場合とはかくとして、感受性に富む小学、中学、高校の時代は一人一人を本当に大切に育んでいく必要があります。それと共に、いのちを大切にする宗教教育が行われねばならないと思います。今日、我が国では、明治三十二年の文部省訓令により、公立学校から宗教教育を除いてしまった（近代諸国家と同調、それ自体は悪いことではない）時点から、宗教軽視の風潮が主調となってしまうたのであります。ここで問題となるのは、宗

教に代わるべき何物も示さずして宗教を除くことに力点がおかれたために国民の風潮が間違ってしまったのであります。今日、私立学校において宗教教育が施され、心の教育にも手が伸ばされているのは救われる気がするのであります。

私どもの学園は宗祖法然上人の開祖になる浄土宗立の学園であります。私どもは心の親様である法然上人の弘通せられた念仏のお蔭の中に生かされているのであり、日々の生活の原動力として揺るぐことなき活力を与えられているのであります。御忌日であります、二十五日の教職員朝礼は仏殿における法然上人御遺訓「一枚起請文」の拝読に始まります。この合掌精神が生徒指導の根源となっていて、ここに本学園の特色があるのであります。単に知識をつめこむためだけの学園ではなくして、確乎たる魂の依所を堅持せる生徒が一人でも多く輩出するよう努力しているのであります。頭脳明晰鋭く鍛え上げられた英才

であっても、果実に例せば、如何に外麗美麗であつても芯に虫がついたものは駄目であると同様、その精神の腐った人物ならば世に害毒を流すのみとなるのであります。凡そ人の生き方は、それこそ各人各様まさに自由でありましょう。然しながら、有限にしてたった一度しかない、しかも受け難き人身に生を享けた以上、いかに生くべきか真剣に考えざるを得ないし、まして世の為、人の為、真に役立つ人間たるにはいかなる人生態度たるべきか、人生の一大事として真剣に考えねばならないのであります。こう考えてくると、大切な私どもの「いのち」は決して自分勝手にしてはならないと思うのであります。恩師、椎尾弁匡大僧正の思想信条の結集であります、「時はいま、ところあしもと、そのことに、うちこむ命、とわのみ命」の御歌は、私どもの、ともすれば怠惰になりがちな心を引き締めて下さるのであります。毎日を無為に繰返す生活というものは、生きるということではなく

して、單なる生存にしかすぎないのであります。只今の一息一息の中に絶対の現在を生き抜いていくという心構えが最も大切なことなのであります。

去る三月二十二日、私は一通の水茎の跡麗わしき葉書を頂戴しました。かねて尊敬しております熊本女子大学のM先生からであります。「本年も貴校生徒様の御奉仕に預かりましたことを心から御礼申し上げます。今日はお彼岸のお中日とて仏巖寺様におまいりさせていただきました。途中でお寺様からのお茶の接待がございましたところ、数名の男子の生徒様方が進んで席を立て、お茶を運んで下さいまして、眉清き少年の君たちからいただくお茶のうれしさ、美味しさをしみじみ味わせていただきました。御法話の終ったあと、合掌なさる敬虔なお姿に深い感動をおぼえました。有難い御縁をいただき感謝をこめて御報告申し上げます。」近來、これほど嬉しいことはなかったのであります。早速、先

生方に披露して、その喜びを分かちあった次第であります。かねての学校教育の成果をここに観ることが出来たことを喜ぶものであります。

知育偏重の弊が説かれて久しいが、動もすれば「知」のみに傾き、実践することの難さ。今日の世相を観ずるとき学行一致の自然の流露は心ある人々の胸を打つと思うのであります。今日の日本人の最大の欠点は、そのアロガント（傲慢さ）にあると言われています。人

教育と自然環境

(一)

智の素晴しさも驚嘆に値するものであります。が、それだからと言って思いあがった気持ちに墮しても困るのであります。大科学者たればたるほど、謙虚な心の姿勢を持つものであります。わが国の諺で言えば「稔るほど頭の垂れる稲穂かな」であります。学問が深まれば深まるほど、未知の分野もまた拡大していくからであります。安らかな精神生活の上に立って、己が業に全力を尽くして、世の為、人の為になる人間になりたいものであります。



やす い ふさ こ
安 居 總 子

(東京・大久保中学校教諭)

四月は年度が改まるせいか、いわゆる挨拶の手紙を頂くことが多い。そしてそれは、百

パーセント、春暖の候とか、陽春の季節と相成りとかの季節の移り変りを表す言葉で始まっている。季節に対する感情を生活の中で表現するのは、日本の風土がもたらすものとはいえ、日本人の表現様式の一特色であろう。

学校の行事も、三月、四月は卒業式、入学式など改まった儀式が多い。そこで生徒代表の述べる挨拶もまた、季節感を表す言葉で始まっている。たとえば、「桜のつぼみもそろそろふくらみ始め、日増しに春の気配が感じられる……」「校庭の櫟はうっすらと緑に、地面には草が芽ぶき……」のように。こうした表現が、きまって改まった場になされるということは、日本人の表現様式の特色とはいえ、それが学校であるところに、教育の問題として考えるべき点であるように思う。

『シンガポールの日本人学校』（講談社現代新書）の筆者日高惇子氏は、在シンガポールの日本人中学生を教えている時、「菜の花って夏咲くんだったなあ」と言った子供の言葉に

対して、日本の中学生を教えていたと同じ気持ちで教えることはまちがっているのではあるまいかと述懐している。俳句の季語も、亀井勝一郎の大和の塔の文章も理解しえない子供たちを前にして、日本に帰ればすぐ感覚を取り戻すにせよ知らぬ間に日本人としての何かに欠けていくのではないかをおそれるとも述べている。シンガポールにはシンガポールの自然、風土があるのであって、日本のそれとは違う。日本人と同じに教育しようとしても無理が生じる。生活する環境の違いが言葉の取得や文化の享受に支障を来たすことの証左である。さきの送辞や答辞にあるような季節感の表現は、日本という環境に住み、日本人として生活してきた結果、自ずと身についたものに他ならない。沙漠地帯に住む子供は黄土一色の絵を描き、ヨーロッパや日本の子供は色彩に富むということを知くが、それも教育において環境がかかわる重大性を示している。シンガポールではシンガポールの、ヨ

ヨーロッパにいればヨーロッパの、日本に住んでいれば日本の、その地域でしかないもので自己形成をはかるより他にないが、だからこそ日本人として育つ自然とか環境を一步つこんで考えることの必要性があろう。

(二)

半月ほど前、私は新入生を引率して、二泊三日の足柄学園（移動教室）に参加した。四月末の足柄は、春が一時に訪れたかのように桜、モクレン、ハナズオウなどが満開、畑中の道はスマイレに埋れていた。木の芽が萌え、風は快かった。子供らは口々に「新宿とは違う」と言った。「なにが？」「空気においがある」「どんなにおい？」「そうだなあ、これが緑のにおいっていうのかなあ」「そうね。これを風かおるっていうのよ。坂を下って行ってごらん。こんどは菜の花のかがりが流れてくる。」新宿のような都市文明の中に育った子供らは、排気ガスのおいとマクドナル

ドやシェーキーズに象徴されるにおいしか知らない。その子らにとっては「緑のにおい」は大発見なのである。学園の屋上で見た早朝の富士は秀麗そのものであった。グランドの片隅で蛙を見つけた時、子供らは歓声を上げた。目にするもの耳にするものすべて発見だった。

日ごろ身近にないもの、あっても気づかずにいるものを、違った場面で遭遇すると驚異を感じるのは人間の通性であろう。場面の違いが大きければ感動も大きい。そこに子供が知恵をつけていく芽がある。自然に恵まれぬ環境にいるから。大自然の場に移して体験させようとする移動教室の意義はここにある。そして行政的に施行されている点では高く評価されてよい。

(三)

京都、南禅寺から永観堂を経て銀閣に至る疏水に沿った道は、「哲学の道」と呼ばれて

いる。筆者も一度歩いたことがあるが、静かで、散策にはもってこいの道だ。同じ名の「哲学の道」が、四年前欧州に旅したとき、ハイデルブルクにもあった。さっそく友人ら数人と歩くことにした。哲学するなどとは程遠い歩きようであったが、対岸の古城を眺めたり、ネッカー川を上下する舟に目をとめたりして、午後の一刻を楽しく過すことができた。所々にベンチが置いてあり、すれちがう人はまれだった。が、この道は全くの自然道だったのである。というのは、たまたま二度歩くことになった筆者は、夜のこの道が無灯であり、かつそのために足もとに苦労せざるをえない羽目になったからであった。世に逍遙学派と呼ばれた人々は、緑陰の遊歩道で思索したというが、こういう道だったのだろうか。そして今も思索をさまたげないために文明を拒否し無灯にしているのだろうか。それにしても緑陰で思索する発想は、古今東西を通じて同じなのだなあ。そう思うとき、かつ

て筆者の学んだ学校には、それぞれ緑陰あり池辺ありで、友人と語りあう場に事欠かなかったことを思い出した。

幸い筆者の勤める学校は、新宿区内では緑に恵まれた学校である。旧前田邸の跡で、斜面をいかして校舎が建てられているが、貴重なのは桜、櫻、椎、柿、白木蓮等七百本にのぼる樹木のあることである。夏には緑陰ができ、春夏秋冬の移り変りを植物たちの変化で知ることができ、昼休みなどは友人と語りあう場を作り出している。これがあるだけで人が育つといっても過言でない。子供らもこの点に感謝している。

(四)

以上述べたように、教育における自然環境の問題は、先ずそれが備わっていることが第一の条件である。備わっていないければ備わっていない状況の中でどうすればよいかを考えることである。新宿区の足柄学園は、自然環

境に恵まれぬ（不十分だ）から、よりよい場を与えることによって教育の効果をねらったものである。

教育とか教育の効果とかは、それなりの目標があつて、それが達せられたかどうかをいうときに使う言葉である。こと学校教育は意図的に行うものであるから、実験室的な要素をもち、目標、学習（指導）、評価の過程をふみ、その積み重ねで効果をはかつていくものである。そう考えるとき、備わっていることが第一の条件であるにしても、それを活用し子供たちにはたらきかけることなしには、教育の効果はあがらないと見るべきだろう。「新宿とは違う」と言つた子供らに、「どんなふうに違うのか。それはなぜか」というような問いかけなしには、事実認識はおろか対象を観る目は育っていかないだろう。「すみれの花の中で一夜を明かした気持ちがわかるか」のはたらきかけがあつて、はじめて子供を美の世界へ誘うことができるのである。

また、自然をどう見るかは、人間をどう見るか、生命をどう見るかでもある。そうした自然観、人間観を育てるはたらきかけも筆者は必要だと考える。それは、実験室的な教室でというよりもっと開かれたところでのほたらきかけであらう。教師の折りにふれての言葉や掲示がそれを果してくれるだろう。筆者の勤務校での昨年一年間の三年生を対象とした書かれた言葉にそれを見てみよう。

☆木々の緑は日毎に微妙に色あいを変えて、その量も増している。大中のシンボル、区の木でもある樺を見て、何か感ずることはないか。このたくましい成長ぶりを見るのは、これで三度め。しっかりと大地に根づいた自然の規則性に学ぶことはないか。

（52・5・9）

☆「万緑叢中紅一点」——王安石——

ザクロの花が鮮か。木洩れ陽が汗ばむ肌にゆらめく。梅雨入りも近い。（52・6・16）

☆木々の緑に目をうばわれている間に、ヒガ
ンバナの葉は見えなくなった。土の中では
九月の花の準備が進んでいるはずだ。一学
期もまもなく終る。長い夏の間の蓄えを君
は知っているか。地下茎を太らせるため
の、花を咲かせるための。(52・6・27)

☆秋の陽光、少い日照の中で、花は一つでも
多く咲かせて実を結ばせようとする。葉は
枯れつくすその最後までその作用をやめる
ことはしない。結実、もうすぐ紅葉、冬を
迎える準備だ。今はその時である。

(52・10・17)

☆落ち葉掃きは終った。用も名を変える。厳
しい冬、耐えることの意味を君は知ってい
るか。樹木はどっしり立っている。裸形の
姿は、すべての虚飾を落した姿だ。その中
で生命は脈打っている。そしてやがて来る
暖かい光に包まれた世界を迎えるのだ。

(52・12・19)

☆三月。日だまりにはウメ、ジンチョウゲが

かおっている。まためぐってきた春。日差
しものび、暖かになった。自然の輪廻、法
則である。君たちはまもなく九年間の義務
教育を終える。これも人生における一つの
節である。美しい節としたいものである。

(53・3・1)

これにみるように、この一連の言葉の中
に、事実を直視すること、自然の現象を正し
くとらえその規則性を知ること、人間もまた
自然の一であることを知って自己のあり方生
き方を問うことが示されている。

たまたま筆者の勤務する学校を取りあげた
が、それぞれ取りまく自然は違ふし、それぞ
れに応じた教育のありよう、工夫があるはず
である。学校においても、家庭においても、
要は、子供にどのように認識させるか、その
はたらきかけを考えてみることはあるまい
か。

ふるさと紀行

只ひたすらに



えの　もと　しょう　おん
榎　本　性　音

(和歌山教区教化団長)
(和歌山県日高町西福寺住職)

今は昔、紀州木ノ国に徳本と申す念仏行者ありけり：
…。行者此の世を去りて本年百六十年、然るに徳本行者
は今もなおこの世に生きて在す。この念仏行者を皆さま
と共に偲んでみたいと思う。
そこで先ず、徳本行者の御生涯を略記して後の話に供
したい。

— 徳本行者略年表 —

○宝暦八年、六日二十二日、現和歌山県日高郡日高町
久志、小百姓三太夫の倅として生れ、幼名三之丞
(十助とも)、三太夫の先祖は桓武天皇より出た富山尾
張守長政の裔、故ありて家名を秘し紀州に落つ。

○同十一月、四月、ある日隣家の児死亡し念仏する。

○年令不詳、隣村の大庄屋、油屋(田端家現存)に下男
奉公。

○十八歳の冬のある日、廻国の行者と覺し人より法然
上人の御遺訓一枚起請文を授かり、これと、紀州初
代藩主徳川頼宣公より領民に下した法度父母状とを
袋に入れ、お守りとして肌身離さず持つ。以後益々

出家を志すも父これを許さず。

○安永五年、三月二十五日、父三太夫亡、十助十九歳。

○天明二年、御坊市財部往生寺で五重を受く、二十五歳。

○翌年、この頃は念仏不断、度々光明奇瑞感得する、二十六歳。

○同年、出家許され往生寺大円和尚について得度、多年の素願成就。翌五年、日高郡川辺町山野月照寺さんや前の丸山で三十日間念仏行。

○同六年、二月十七日、同村千津川せんづがわの落合谷にて念仏練行を始む、寛政六年十月迄六カ年。

○同八年、三十一歳より除髪せず。

○寛政三年、十月、六カ年の念仏満行、以後教化の旅に出る。その教化は一般庶民のほか、紀伊藩、京都仙洞御所、江戸徳川將軍家、その他東海道沿線、中仙道北陸越前加賀、岐阜信濃路木曾路、関東各地を巡教され、各地に残す上人の名号石は千基に達す。

○文政二年、十月六日、満六十歳江戸一行院で遷化。

○遺す道歌 三百六十余首

○紀伊藩主が上人の徳を讃え、御遺跡として建てられている寺――

無量光寺Ⅱ和歌山市寺町 藩主教化の地

誕生院Ⅱ日高郡日高町久志 誕生の地

尊光寺Ⅱ日高郡川辺町千津川 念仏練行の地

西法寺Ⅱ有田郡宮原町 念仏教化の地

右は徳本さまの御一生の概略を列举しましたが、六十年の前半は念仏修行時代で、後半は教化の時代と言えるでしょう。そして念仏修行時代では、千津川での六年に亘る念仏行がその一生を左右する中心となっています。幼名を三之丞、やや長じて十助と呼ばれたが、人間の一生は「念仏生活」することでこれを心に深く決心したのである。

○出家許されるまで

青年期に入った十助は、ある日旅の老人から『一枚起請文』をもらった。これは浄土宗の元祖法然上人の御遺訓であって浄土宗の信者にとって亀鑑とも言うべきもの

である。これを読んで益々念仏する心が強くなった。この『一枚起請文』こそ何よりの宝物であると、これを袋に入れ肌身はなさず持つてお守りとした。

十助の心は日に増して出家の志が強くなるばかり、そこで父に頼んでみるが許されない。許してくれない父ではあるが、十助は父母には孝行を尽した。父が病氣するや和歌山の医院まで往復百キロの道を月に十数回も往復して看病をした。彼の心中には親孝行と念仏のほかは何もない。只ひたすらに親を大事に、只ひたすらに念仏する毎日であった。

十助が十九歳の春、遂に父は逝去された。その後は称名念仏に励んだ。どうぞ坊さんになれますようにと、十キロの道を遠しとせず観音さまと大日如来に日参した。

二十六歳のある晩、念仏の功積ってか、如来の光明をありありと感得した。念仏三昧に入ると部屋が晃々と照らされる事しばしば。こうした日が続いて母は遂に出家を許したのである。

○出家・入行

母から出家を許されたのは天明四年六月二十七日、天にも上る喜びで、前に五重相伝を受けた御坊市財部^{たから}往生寺大円和尚の門に入り得度を受け、長年の素願達成した。ここで今までの十助とも別れて徳本と改命された。いやいや坊さんになる人、止むなくならせられる人も居るが今、歓喜勇躍の中に出家しただけに坊さんとしての修行の覚悟は十分出来ている。一カ月の加行^{けぎょう}ですら大儀であるのに、徳本さまは一カ月はおろか六カ年の大行を心に秘めている。しかもその行たるや決してなまやさしい行ではない。誰から強いられるでもない。自ら悦び勤める精進行である。

師の大円和尚から先ず僧としての儀軌や和歌道を習い、天明五年の春は大滝川の月照寺の大良上人の下、三十日間念仏行道、夜は仏前礼拝、その間一日の食糧、麦粉一合の苦行を達成した。

続いて同村千津川^{せんづがわ}の落合谷に来て見るに、ここも山累水明で人里離れた狭谷である。幸い土地の農業坂本林助妻・源兵衛母等が草庵を造り上人の念仏行に援助してくれた。ここから本格的な練行に入るのであるが、朝は暁を破って谷を流るる小川で水垢離、礼拝、木魚を叩いて

念仏勤行、身には木綿の腰巻を縄帯で止め麻の袈裟、食は麦粉又は豆粉を水でこね一合を一日の食とし、決して火を用いなかった。夜は横臥せず坐ったまま仮眠をとり、髪を刈らず、一刻を惜しんで念仏精進、顔を見れば毛ばかり伸びてその奥に眼球が光り、頭髮長く伸びた姿はまるで深山幽谷に住む仙人にも似ていた。嚴冬にはひびあかぎれの亀裂から鮮血が流れても一千遍の礼拝は続けられた。この貴い称名念仏行は寛政三年十月、徳本上人三十四歳迄六カ年の長さに及んだ。かくて満行の暁には仏の大智映発して大悟された。

浄土宗の教えは決してこんな難行苦行を教えていないのであるが、徳本上人の場合自ら進んでこの苦行を悦びの中に成し遂げたのであって、苦を苦と思わぬ喜びの中の練行であつたのである。

○教化の旅

信者・ファンは有難いもの、上人は何処に行っても引張風、歓迎の人々は上人からお十念を授りたい、お顔を拝むだけでもよい、顔が見られなきやお声を聞くだけで

もよい、道は人の山、京師を發つて桑名の渡しにつき給うや群衆のため身動きすら出来ぬ有様、辛じて御鎧を船に乗せるや、宮の駅より御迎えにと多くの船出で集り七里の海上大方は船ばかりであつた。(第二回関東下向の折)

○助けられた殿様

チンテンテマリで有名な紀州の殿様は立派な殿様ばかりで善政を布かれたが、中で第八代藩主徳川重倫侯だけはその性狂に近い暴君で恐れられた。一たび怒号発せば家臣侍臣、妃、妾の別なくすぐ手討ちにする短気者、たまたま参勤交代で江戸在勤中、隣の松平邸の女中に発砲し御府内の禁令を破り遂に隠居を命ぜられ、剃髪して太真と号した。

この狂暴太真侯に徳本上人が授戒する事になった。太真侯の第二子治宝侯第十代藩主のおはからいである。太真侯にとっては初めての仏縁である。授戒の日は一日一日と過ぎてゆく。人間は人間の力で生きられない。すべて如来のみ力のおかげの中に生かされている。如来の偉大なお姿の前には人間の醜さが大きく開かれてくる。如

来の大きいお慈悲の前に己の過去の罪の深さがひしひしと感じられる。今日迄殿様というものを笠にして、幾多の貴い人命を丸で大根でも切るように。そしてその償いは……これが称名念仏によって救われるとは。

世間では早くも、この大殿様を済慶するのは徳本上人様だと噂した。ある日、侯が上人の衣の袖を覗いてみると、お手討された怨霊たちが浮かびきれずに地獄の呵責を受けている姿を見て驚いた、と。しかしこうした事は侯の心中を察すると何も不思議ではない、と。(紀州では今もこうした話は伝っている。)

◇徳本上人の道歌より

一心に南無阿弥陀仏と云ふ時ハ

我が阿弥陀か阿弥陀が我が

本願の綱に阿弥陀とすかりつき

踏みはつしても落ぬ也けり

唱れハ南無阿弥陀仏の撰取ハ

たゞ皆もとの清じよう光也

(こ)(ば)(な)(し)

法然の酌、善導の酌

京の都のちょっと気のきいた坊さんが、ある時檀家の命日の法事にいささか遅参してしまった。——家の方は結構早く出たのですが、道すがら途中で「酒もり談義」に立ち寄ってしまったので遅れてしまいました、という。そこで、「酒もり談義とは何事ぞや」と訖問したところ、

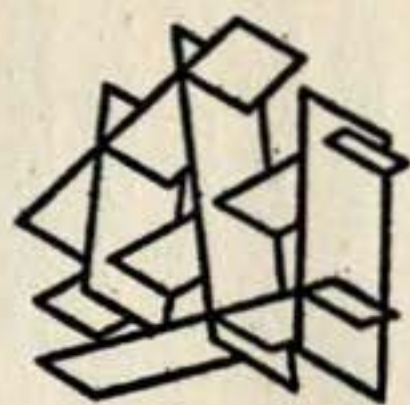
されば、もはや立たんとはねつくろひせしに「ここをば法然の酌にて一つ申さん」とあり。また立たんとすれば、「善導の酌にて、ま一つ申さん」と。(角川文庫本『醒睡笑』下巻、一五九ページ)

というように答えたというのである。いわゆる、お酒の一杯のお酌を、法談の解釈ということにひっつけた洒落(しやれ)で、こういうのを秀句(しゅうく、すく)といって、秀逸な美辞麗句やこのようなちょっとした冗談や駄洒落の類いを意味していた。

安楽庵策伝の時代、すなわち近世初頭の町中の軽口や雑談に、こうした法然や善導の名前がひょいと出てきて、しかもそれが民衆のユーモア話の世界にまでよく浸み込んでいるのが理解されよう。

(H)

宇都宮一族のこと [二]



梶村 昇 かじむら のぼる

(亜細亜大学教授)

(二) 宇都宮頼綱のこと

(2)

精神とは、本質的には、きびしいまでに孤なるものであろう。たしかに、先に述べたように、頼綱には、熊谷のような愚直なまでな一筋さというものはなかったかも知れない。しかし、彼は、下野国の河内郡、芳賀郡から

常陸にかけての所領をもった豪族の当主なのである。世俗的な栄華からみれば、何も出家して入道になる必要はなかったはずである。たしかに、その間には、いろいろな事情があったであろう。たとえば、建久五年(一一九四)五月、下野国司行房ゆきふさが朝廷に、頼綱の祖父朝綱が公田百余町を横領したと訴えてた。同年七月、朝廷では、その訴えを正当として、朝綱を土佐国へ、孫の頼綱を豊

後国へ、頼綱の弟朝業ともなりを周防国へ配流する旨を幕府へ伝えた。幕府は驚いて「関東のために眉目を失う」と述べているが、結局は配流され、のちに許されている。これなどは、武士の抬頭に伴い、国司制度が衰退し、国衙領こくがが有力武士や寺社の私領と化していく、という当時の風潮に乗じて行なわれたものが、たまたま訴えられたものであったが、若い頼綱にとっては衝撃の事件ではあったであろう。「若い」といえば、頼綱はこのとき二十三歳であった。父の成綱（業綱）は病弱のため早世し、祖父朝綱の後を頼綱が継いだために、祖父と共に配流の憂目を見たわけである。

この事件よりも衝撃的であったのは、頼綱が三十四歳になった元久二年（一二〇五）八月七日、彼が鎌倉に対して謀叛をするという嫌疑をかけられた事件であろう。『吾妻鏡』は、この事件だけで八月の記録を占めているほどであるから、相当の事件であったとみてよい。同月十六日に、頼綱は即従六十余人とともに、髪を剃って出家し、幕府に対し異心のないことを弁明し、漸く許され

ている。『吾妻鏡』は、この時の頼綱の法名を「蓮生」と書いているが、すでに入道となつてゐる熊谷直実の法名もまた「蓮生」である偶然の一致か、それとも頼綱の心の中に、熊谷の生きざまに対する憧憬がすでにめばえていたのか、いずれともそれはわからない。浄土宗では、頼綱の方を「れんしょう」、直実を「れんせい」と区別して読むことにしている。

頼綱に謀叛の気持が本当にあつたのかどうかはわからない。ただこの元久二年という年は、人間のみにくさのさらけでたような年であつた。六月には、北条時政の陰謀にまきこまれた畠山重忠が殺され、七月には、頼朝の義理の子にもなつてゐた平賀朝雅ひらがともまさが、同じく時政と後妻の牧の方にかつがれて、三代將軍実朝にとって代ろうとした陰謀がばれて殺されている。そして八月には、頼綱自身みづかみが嫌疑を受ける身になつたわけである。『吾妻鏡』に書かれてゐることが、すべて事実であるかどうかは疑わしいのであるが、事実の詮索より何より、人間同志が疑がいあい、殺しあつていったということだけは、はっきり

とした事実なのである。

それでも、この猜疑にみちた世界を、何とかくぐり抜けて生きていくのが世俗の生き方というものであり、多くの人々は、そうして生きてきたのである。頼綱もこの生き方ができないわけではなかったであろうと思われるのであるが、彼は、これから三年後の承元三年（一二〇八）に、法然上人の門を叩いたのである。少くともこの時点では、頼綱の心境は、世俗生活を捨てるだけの覚悟があったのではなからうか。と思うからこそ、せめて頼綱が法然上人の活躍期に、もう少し長く教えを受けていたならば、この心境がもっと研ぎすまされたのではないかと思うわけである。

話はちよつと横道にそれるが、けだつぼうじようけい解脱房貞慶という人がいる。興福寺で活躍した人で、若くして仏教界の寵児的存在であつた人であるが、この人が笠置に隠遁後に詠んだ歌が、『続後撰集』に載っている。

世を遁れて後、公請のために、記し置ける文を見

て

これをこそまことの道と思ひしに

なほ世を渡るはしにぞありける

というのである。まことの道を思つて入つた僧侶の世界も、実は世間を渡る橋でしかなかったのだ、ということなのだが、この人は、法然上人が専修念仏を唱道したことに反対して『興福寺奏狀九箇狀』なるものを書いた、専修念仏弾劾の南都側の中心人物であるだから、といつて漫罵するつもりは毛頭ないが、この歌などはまことにつまらぬ歌で、「なお世を渡るはし」であつたと感じたのは、自分自身の行業がそうであつたということなのであつて、それを仏教界の責任みたいにいっているようでは、精神の低さをみずから証明したようなものである。仮に法然上人であつたならば、上人は、自分の生涯をふりかえつてみて、「実はあれば世間を渡るための橋であつた」などといえるであらうか。そのようにつまらぬも

のではなかったはずである。

しかし、それは法然上人であればこそであって、一般には、たしかに貞慶の詠んだ歌の通り、仏教界といっても、「世を渡るはし」にすぎなかったのであろう。

どうして、突然、このような話をもちだしたかといえ、頼綱の折角の志にもかかわらず、彼の出家後の生活は、さむらいから文化人の生活に変わったに過ぎない、という程度のものであったように思われてならないからである。ちょうどこの貞慶の歌にあてはまるようなものはなかったか、と思われる。

彼が歌人藤原定家と親交のあったことは有名な話である。彼れは、定家をしばしば嵯峨中院亭に招いて、歌会を催し、また障子へ和歌の執筆を依頼などしている。これは定家が『明月記』にしばしば記しているところである。「小倉百人一首」は、この二人の間から生まれたといわれる。頼綱の娘は定家の息男たみい為家に嫁して為氏たみうじを生んでいる。また、頼綱の歌は、『新勅撰和歌集』以下十一にわたる代々の勅撰集に、一首ないし六首宛くらい選

ばれている。まさに文化人宇都宮頼綱である。生臭い武士の生活からみれば、どれだけ優雅であったかわからない。宇都宮弥三郎入道蓮生と名前の変わったことは、まことに文化人として「なほ世を渡るはしにぞありける」である。

このような中で、かつての頼綱らしい精神のきびしさをしのばせる一事件が起った。それは、先にも記した嘉禄の法難（一二二七）での出来事である。この法難は、法然上人滅後十五年目に起ったことで、上人の高弟であった隆寛が『顯選撰』という本を著し、叡山の関係者であった並なみ覆ふくの定照じょうしょうという人の『彈選撰』という本を論破したのである。定照は怒って、山門の衆徒をたきつけ、ために隆寛・幸西は流罪となり、同時に、法然上人の靈廟を破却して遺骸を鴨川に流そうとした事件である。このことを聞きつけた上人の弟子たちは、いち早く上人の遺骸を改葬してしまおうとし、暗夜これを掘り、ひそかに嵯峨の方へ移してしまったのである。このときの途中の警固に宇都宮頼綱が出てくるわけである。『四十八巻伝』

(卷四十二)は、このときの模様を次のように記している。

西郊にわたしたてまつるに、路次の障難をおそれて、宇都宮の弥三郎入道蓮生、塩屋の入道信生、千葉の六郎大夫入道法阿、渋谷の七郎入道道遍、頼宮の兵衛入道西仏等、出家の身なりといえども、法衣のうえに兵杖を帯して、御ともに参しければ、家子郎等など、あひしたがひける程に、軍兵済々として前後に囲めり。遺弟以下御とも参ずる人一千余人、おのおの涙をながし、かなしみをぞふくみける。

と。このことは、『四巻伝』はじめ、数本の法然上人の伝記に記されているところであって、いずれも、宇都宮頼綱が中心人物として働いたように書いてある。文化人頼綱ではなく、坂東武者宇都宮頼綱らしい凛々しさを思わせるものがある。彼の行動は、師の証空が、専修念仏の徒ではないなどといって流罪を免れたことに対しての、武者頼綱の意地を示したものであろうか。それとも、こ

んな考えはゲスの考えであって、証空は、もっと深くおもんばかって、この事件が容易ならぬものであると察知し、「専修念仏の徒ではない」とまで偽って京都に残り、後の事態に備えたのであろうか。とすれば、頼綱らの出動は、みな証空の指示に基づいたものとも考えられる。歴史の事実というものはなかなかわからないものである。わからないままに、知己を千年の後に、なお求められずに、悪罵に耐えて生きていかなくはならない人の悲しみを思うこともある。真の勇者とは、そういう人かも知れない。

(つづく)

『新刊』

梶村 昇 著

『法然のことば』(宗祖のことばシリーズ④)

B6判 二三四頁(カルチャープックス)

定価 八〇〇円

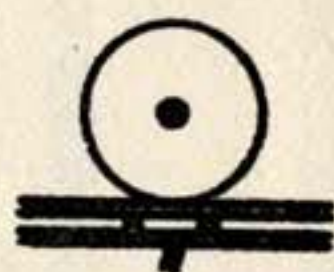
(発売元)

〒102 東京都千代田区富士見二一六―九

雄山閣出版株式会社

読者の便り

輝く島スリランカ



きょう 基 貝 いそ 磯

陽光と緑に恵まれたインドの眉間に輝く真珠の島と讃えられるスリランカ。青い絹雲。紺碧の海。黄金の砂。二千余年の歴史を伝える仏跡。釈迦の涅槃像にひざまずき敬虔の礼拝をする仏教徒。草原のかなたに沈む壮観な夕日を見ながら私はしみじみとスリランカへ来てよかったと思った。ネコンボからカンデー、コロンボ迄は毎日四時間前後のバスの旅である。コロンボから地方へでる国道はみな舗装されてある。海岸沿いは熱帯の色とりどりの花が咲き乱れヤシの木の間である。漁師町にはカトリックの教会があり、仏教徒は山村農村に多くあり魚は食べないという。農村には草原、灌木林、森林が広がり池や河や貯水池。湖が多く、水のある所は水田茂り野菜畑も多く、緑色こく豊かである。海拔二千米のヌワラエリヤは多くの峠をこして、遠い遙かな山の上まで茶畑が整然と栽培され茶つみ女の顔は明るい。その面積は二十万ヘクタールで茶は千米以上の山野のものが良質でうまいという。住民はやや楽な生活をしているようだ。男は白か模様のあるサロンと

ワイシャツである。日本の越中フンドシで水泳している姿がしばしば見られる。女はサリーで約九割の人がハダシである。

住家は、地主などの家はヤシの木林の入口に扉をかまえ立派な鉄筋風の瓦葺の家だ。沿道の農民はヤシの木の柱でヤシの葉で葺いた粗末な家が多く、野菜、果物、カメ、ヤシのロープなどの雑貨も商っている。インドのように遊んでいる人は少く、ヤシ林、畑でよく働いている。

学校は日本のように小中高でなく十二年制である。校舎は二階建が多く広い校庭もある。小供の服装はさっぱりしていて感じがいい。午後一時頃は二、三冊のうすい本をかかえて喜々として帰る。インドの子供のように物をねだる事もなく生々として輝くように目をばちばちして私達を物珍らしそうに見る。手を上げて歓迎の挨拶もする誠に可愛い子供達である。一般労働者の給料が一カ月一万二千円位で余り多くはないようだ。物価が安く、よく働く。子供達の瞳の輝くような表情から察すると、彼等は幸福そうである。

カンデーにあるセイロン大学は、豪華な各学部校舎の棟が広大な地域に並んでいる。学生は六千五百人位で、カンデーの地が気候はよく美しい自然に恵まれ、また物価も安く楽しい町なので学生は余り勉強しないという。十年に一回国家試験が行われるとのことだ。

インドと同じように国道には放牧の牛が多く主として小牛である。インドでは牛は食べず放牧の聖牛だというのがスリランカでは労役の牛であり、ヤシの実、木材、野菜をはこんだり食用に供する。国道は放牧の牛が群れをなしている。水たまりで水泳している様子は、のどかで面白い風物だ。

車は英国製のものが多く国道はトラック、バスの往来が激しい。バスの料金はコロンボとカンデー間は東京から三島位で八十円位だという。列車はインド製のディーゼルでのろのろ運転で往復回数も少く料金もバスなみで極めて安い。インドでは踏切の遮断機が下りていて三十分も待たされるが、こちらはすぐに通れる。

賃金については労働者、会社員、公務員

など大体一万二千円位で中年になると二万五千円位だ。物価も極めて安く一ルピーは日本の十四、五円で、タバコ十本入が二ルピーほど、ビールが十ルピー位である。

紅茶の香りはいまだに残っている。毎日五、六杯は呑む、生水は呑めないのも、街のスタンドで呑んでも七、八円である。紅茶の産地はカンデー。ヌワラエリヤ等五大産地があり、千米以上の高地のものが良質だという。帰りに空港で買ったのは、一ポンド二百五十円だった。

米は主要な産物で、水のある所は青々と緑したたる水田が多い。水の少いインドの倍の成育ぶりである。本場のカレーは肉、魚、野菜など味付けしたものもザラザラしたライスのまわりにのせてごっちゃにして食べる。余りの辛さに顔はほてり胃のあたりが温くなる。バナナ、マンゴ、パパイヤ、アップル、オレンジと果物は豊富で、ホテルでは食べほうだいた。

スリランカといえば紅茶、仏跡、宝石である。ルビー、アレキサンドリヤ、キヤットアイ、ムーンストーンなど十二カ月の誕生

石を産するという。日本にもつてくると四倍になるとのことである。また、猫目石は面白い石である。

驚きはカンデーのマーケットである。牛、羊、豚などの胴、脚、首、ツメの付いた足、臓物などが血のついたままぶら下がっている。野菜、果物など色とりどり豊富で美しい。カケ声はすさまじく冷蔵庫がないので、その日の内に売らねばならないので、朝市は高く夕市は非常に安いという。

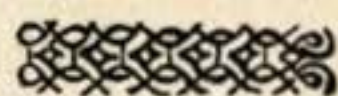
生水は呑めないホテルの水か紅茶か果物にかけて呑む。熱帯なので河、貯水池では大人、子供、若い女は一日に一回は水泳するという。

河でセンタクする人は多く、衣類が草の上に乾してある風景はあざやかである。

農民は賃金が安いので、日本風の堀立小屋に似た板や、ヤシの葉で葺いた小さな粗末な家が多い。

スリランカは気候がよく美しい花、緑色こい自然の豊かさで、しかも物価も安い。そして、スリランカは、国教である仏教を熱心に信仰する仏教徒の国である。

浄土句集



御忌僧の鞭御絵伝を説きすすむ
福岡 高良 慈風

評 御忌は法然忌とも申す。法然上人の御絵伝は弥陀の四十八願にちなんだ四十八巻で、それを本堂にかけ連らね、御忌僧が桑の鞭で絵説きをすれば、善男善女が涙して手を合せて拝んでいるのである。

母のこと父のことなど彼岸かな
東京 新井 新生

評 亡き人の追善には、「その人の親族のもの勤むるぞ必らず届きはべる」由で、親のためにはその子、夫のためにはその妻が。そして、彼岸ともなれば恋し懐しの父や母が臉に浮かんで、思わず手を合せる気持ちになるのが人の子の美しさである。

一田牛畝選

幕を張る彼岸天氣を案じつつ
大分 丹羽 難中

我もまた八日生れや花祭
東京 栗原やえ子

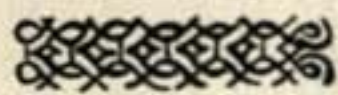
桜餅角の餅屋の紺のれん
東京 真野よし子

春めけるものの静かや雨の音
東京 鳥居 千代

霜除をはずせばありし牡丹の芽
東京 田中 秀代

母の忌の囁ききつつ一人かな
東京 猪瀬 幸子

福岡 原 敬二郎



お住持に内孫三人彼岸寺

東京 星野 小登

雨あがり庭に紅白落椿

東京 末常てる子

なつかしき母手造りの田螺あへ

東京 大野いく子

母と娘のつく鐘の音や春来る

福岡 増谷 雄鳳

呑む乳をやめて見上ぐる鯉幟

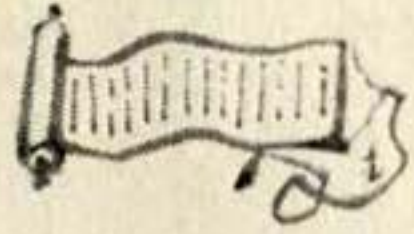
埼玉 佐藤 泰子

浜風に花大根の揺れ止まず

京都 安藤 寛

売られ行く牛泣く息の白さかな

四天王のけぞり合ふ微給ひ
一田 牛畝



念佛ひじり三國志

(平)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

成覚房幸西がいつ比叡を下山し、京都の何処に居を定めて念仏ひじりたちの結集に奔走したのか、資料上では一切が不明である。後世の浄土教団史は、むしろそれらの資料を意識的に抹殺した底意さえうかがわれる。一念義を邪法ときめつけるだけでその行動軌跡を追おうともしない。

浄土教団が、証真門下で幸西のライバルだった聖光房弁長を、法然を継承する「二祖」と仰ぐからにはそれも

当然であろう。しかしこの姿勢を頑守する限り、当時の実状を解明することは不可能である。

ところで特定の意図を持たぬ資料は、淡白に歴史の真実を語るものだ。

「私聚百因縁集」で住信はこんな記述をのこしている。

幸西、聖光、隆寛、証空、長空コレアリ。門徒数千万ナルモ上足ハ此ノ五人ナリ。

叡山黒谷このかた法然に随侍してきた法蓮房信空以下

の内弟子や安樂、住蓮などすべてを除外する。

また凝然の「浄土法門源流章」も法然門下を幸西、隆寛、証空、聖光、信空、行空、長西の七師をあげ、日蓮は「一代五時図」で隆観（長樂寺多念、隆寛のこと）善慧房こさか（証空）聖光、覚明（長西）成覚（幸西）法本（行空）を上足としている。行観の「観經玄義分秘鈔」は成覚房、隆寛律師、聖光房、証空の順である。

殆んどの資料が成覚房幸西を法然門下のトップクラスに列せしめている。幸西だけではない。彼のライバルだった聖光房弁長もまた重要な地位を与えられている。

これまで法然と没交渉だった幸西や聖光がなぜこの時点で俄然、念仏者としての像を拡大したのであろうか。

われわれはそこに法然をめぐる念仏ひじりの集団に变革、飛躍がなされた事実を見逃してはなるまい。この变革、飛躍に幸西や聖光は重要な役割を果たした、と考えたい。

变革、飛躍とは何か。専修念仏が一つの宗教思想から教団結成という行動性を機能しはじめたことだ。それは法然自身の内面にあって強く決断されたはずである。建久九年正月（一一九八）から三昧発得へはいり、「選択本願

前号のあらすじ

比叡山西塔南谷。木曾義仲の京都乱入など、混乱期にありながらも、ここでは叡山きつての学匠宝地房証真を軸に熱心な求道の僧が集まっていた。成覚房幸西は聖光房弁長とともにその中では俊英と目され、証真も西塔慧心流、いや叡山全体、天台教学の前途をこの二人に託していた。しかし、叡山もこの西塔を残して他は、当時の世相を反映してか、学問の府というよりもさながら武衛の府といった様相を呈するに至っている。

南谷鐘下坊に幸西を訪ねようとした法本房行空も僧兵に呼びとめられた。行空とは法然上人門下では異端の寂光土義を唱え、「一宿の上人」と呼ばれる蓬髪（ほうぼう）の念仏ひじりである。行空の来意を聞き、また師証真から弁長の念仏門転向を知らされ、幸西は自らも専修念仏門に入る決意を固める。

念仏集」を門弟にまとめさせたり、これらの行動力が幸西や聖光の抬頭と時機を同じくしている。承安五年、比叡山黒谷を下って以来の法然にはなかった行動力であった。

各所に散らばる念仏ひじりたちの大同団結。そのオルガナイザー（組織者）に成覚房幸西を擬せられぬであろうか。もちろんその下で安樂房遵西や法本房行空の助力があったことも忘れてはならない。つまり幸西は、法然の

信仰上の上足というよりも新しき浄土教団のなかで法然に次いでナムバー2の地位を占めた、と考えるべきであろう。

では、聖光房弁長（鎮西上人）が果たした役割は何であろうか。この点はあとで詳しく触れてみたい。

律令制のもとで、新しい仏教教団、新宗を設立するためには次の四条件が充たされねばならなかった。

一、教相判釈

二、宗名の典拠

三、所依の教典

四、師資相承

一の教相判釈は、新宗が信奉する教義上の立場を仏法のなかから明確に位置付けることだ。この点浄土教は他力易行道を主張し、聖道門と対立した価値観を、末世末法を思想を背景に打ち出している。二の宗名典拠は浄土宗であって問題はなく、所依の経典——裏付けとなる経典も浄土の三部経が厳存するので疑義をさしはさむ余地はない。つまり条件の一から三までは明快かつ簡単に処

理できたのである。

ただし、これだけのことだったなら今更新しく浄土宗を提唱する根拠にはならなかった。念仏思想はすでに奈良時代から日本へはいりこんでおり、比叡山では慈覚大師このかた天台止観の実践要目に常行三昧の念仏を主流としてきたからである。

法然及びその周囲がこの建久末年において、新教団設立の主軸として強調したのは四項目の師資相承であった。

仏教が言う師資相承とは、新しい教義を首唱した師僧からの正法の継承である。インドから中国へ伝わり、さらに日本へと渡ってきた仏教は、律令制下では当然その師を中国に求めなければならなかった。

その点で法然は「選択集」の冒頭で明快に誰を師とするかを言いきっている。

聖道家ノ血脈ノ如ク浄土宗ニモマタ血脈アリ。タ
ダシ浄土一宗ニアツテモ諸流ハ同一ナラズ。イワ
ユル廬山慧遠法師、慈愍三蔵、サラニ道綽、善導
ノ念仏コレナリ。

浄土宗には三流があつて、内容はそれぞれ異質なものと強調する。

慧遠法師（三三四—四一六）は東晋の乱世、廬山に百二十三名の門弟とこもり、念仏三昧にふけた。白蓮社と呼ばれた結社グループだ。だがこの慧遠流は聖道門に基礎を置き、その助業としての念仏だったことが明確である。民衆救済の念仏ではなかった。

比叡山に伝わった常行念仏はこの流派を継承したものである。良源、源信（恵心僧都）、覚運らの念仏は皆これだと断ずるのである。

慈愍三蔵（六八〇—七四八）は戒律との結合において樹立された念仏であつて、念仏しつつ律を固めてゆくものである。純粋な庶民救済の浄土教とは言えず、南都奈良の念仏をその亜流だとほめかしている。

わが専修念仏は諸行を廃立し、純粋な本願念仏を主張した道綽、善導の系譜を継承するものだとして、ここに新しい教団を樹立する根拠を明らかにした。特定の僧家や居士のものではない広く民衆救済のための念仏がそこにはある。「観無量寿経」が説く下品下生（無知で罪深い）の大家が阿弥陀仏の慈悲で救われるための唯一つの方法。

弥陀の名を呼べ

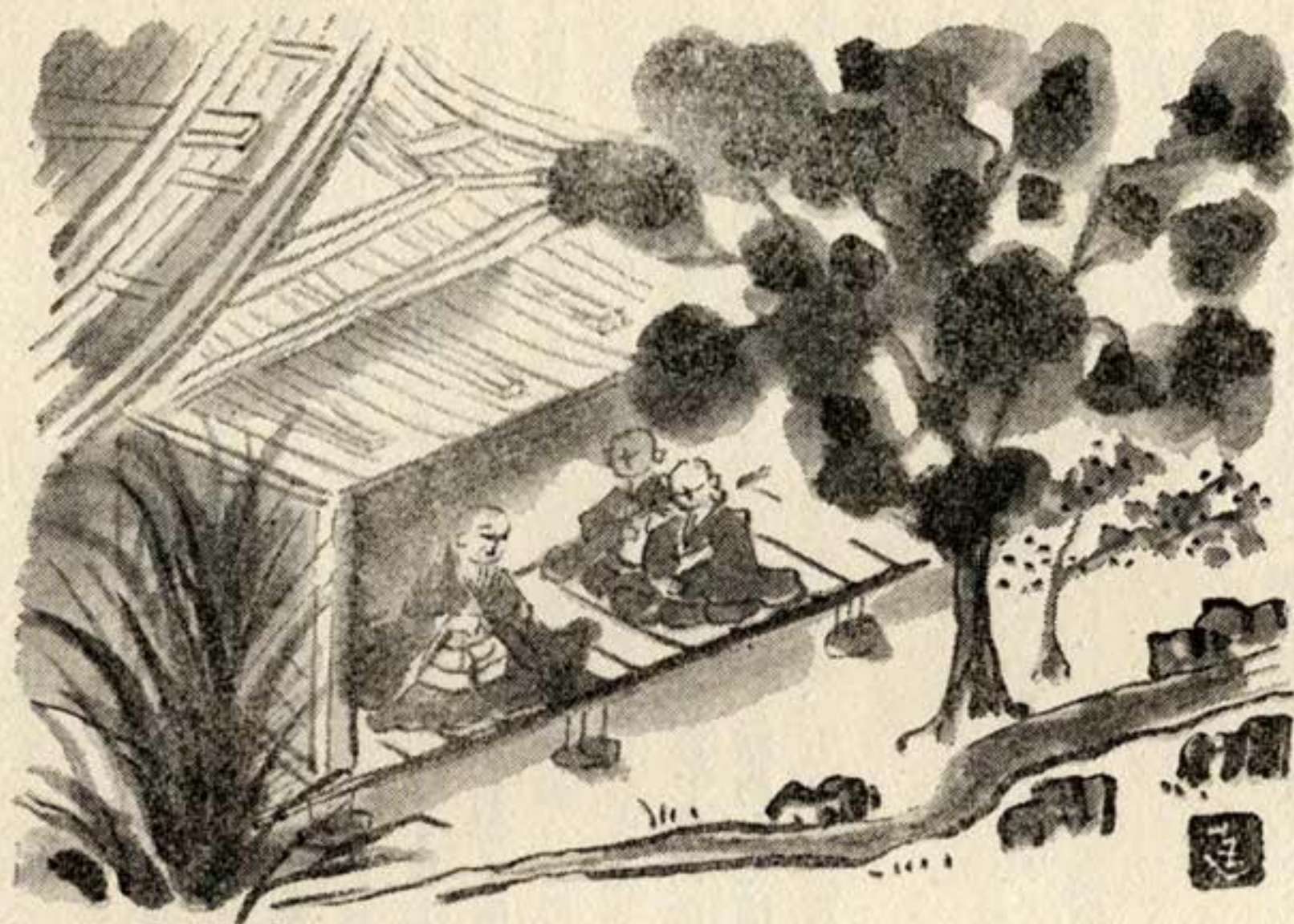
称名念仏の師資を道綽、善導に求めたのであった。思想上の師資相承は、この三流分析、善導選択でまさしく明快である。問題は血脈相承の具体的な方法だった。いつ、何処でどんな方法によって、相承するのであるうか。

善導はすでに五百余年の昔に世を去っている。その門流が大陸各地で布教中とは言え法然はかつて海を渡ったこともなく、また将来にもあり得ないのである。だいいち法然は、四十三歳で黒谷を去って以来、つねに「偏依善導」を首唱し続けてきた。

ただひとえに善導に依るのみ、とは、懷感や懷憚、浄業ら善導末流の念仏を否定する意図もふくんでいた。五百年の時間と、中国大陆への遠い空間とを克服して、法然はどんな方法で善導念仏を相承しようとするのであろうか。

成覚房幸西が初めて法然の面受を得たのは日時こそつ

＜縁先の法然＞



まびらかにしないが、建久九年の二月も尽きようとする日の夕暮れであった。法本房行空にとまなわれて、東山の太谷禅室へ登っていった。

東ノ房、西ノ房にはさまれて、建物が最も古く粗末な中ノ房が法然の居室であった。西山広谷から移築したもので、古くて手狭でも法然はこの建物を愛し、他へ移ろうとはしなかった。

二人は中ノ房の戸外に立った。内部から夕暮れの日課念仏が洩れてくる。門弟たちの合唱、そのなかには法然自身の声もふくまれているはずであった。

「だいぶ元気になられたな。昨日までは臥しておった」
行空は縁先から内部を覗きこみ、法然の所在を確認しながら呟いた。

「いつもあの常行三昧をやっているのか」

「うむ。法然ご房の周囲には、黒谷以来の古い弟子どもがおってな。古臭さい念仏を唱えよる」

吐き棄てるように言う。専修念仏を新しき時代をリードする革新思想と気負いこむ法本房行空には、比叡山からそのまま持ち来たった常行三昧念仏が古臭さく感ぜられてならないのだ。

だから今も戸外に立ちつくすだけで、日課称名の座へ加わってゆこうともしなかった。

「あれほどの頭脳を持ち、観想も鋭敏な法然ご房が今日まで何もなされなかったのも所詮はあの古臭さい門弟どもに引きずられたからだ。もっともご房は情義に厚いお方でな、むげに切り捨てることもお出来にならない」

行空がわざわざ比叡山へ登ってきて幸西の出慮を促した動機もこの点にあった。念仏ひじりの集団に新風を吹きこんで、一挙に天下をおおいつくそうと覇氣満々なのであった。

しかし幸西はこの時点において、未だ念仏ひじりになることも、法然門下に参入することも行空と確約してはいなかった。すべては法然に面受してから、と自身に言い聞かせている。

やがて、室内で合唱の声がやんだ。

夕餉の支度にも取りかかる門弟たちの動きが戸外へもつたわってくる。

「ご房だ」

行空が短く叫んだ。

今しもひとりの老ひじりが縁先へ姿を現し、そろえら

れた履き物に両足をさし入れはじめた。よほど体力が衰えているとみえ、動作の一つ一つに随侍したひじりの手を借りなければならなかった。

成覚房幸西の眼が鋭い光りを放った。射すくめるように、縁先に腰をおろした法然を見た。

いや、法然を、ではない。いまこの聖者に手を貸している随侍のひじりに、であった。

聖光房弁長ではないか。同じ証真門下の俊英、名実ともにライバルであった。

弁長が法然門に参じた事實は、つとに承知していた。幸西下山の決断も、ライバルの行動も知ったからこそである。

でも意外だった。参入後、短時日のはずなのに、弁長はここまで深く法然に接近していたのか。あたかも幾十年も仕えた内弟子の如く面倒をみているのである。法然も万事を弁長にゆだねた恰好だ。

弁長の視線も鋭く幸西の面上へ向けて走った。

視線が結ばれて火花を發した。鋭い無言の会話がかわされたようである。

——おぬしもとうとう此処へやって来たのか。

と、弁長は問いたげである。

——来ないわけにはゆかぬだろう。

と、幸西は突っ返したかった。

そんな応酬は法本房行空には無縁なことだ。彼は法然に近づくと、幸西を紹介した。

柔和な法然の笑顔が幸西をむかえた。

「一念往生義のことはこの人から聞いている」

行空をかえりみる。

「これをご披読頂ければ」

と、幸西は懷中から自筆の「玄義分抄」を取り出した。比叡下山を決意してから夜を日に繼いでしたためた自分の念仏觀を総括したものであった。

そこでは、救済仏である阿弥陀如来と凡愚人間との關係が熱っぽい情念を基調にえがきつくしてあった。後年、親鸞が強く影響されて、「歎異抄」の作者である唯円も下敷きにしたと伝えられる幸西思想の代表的な著作であった。

法然は「玄義分抄」を手にしたまま戸外に降り立つと足早に歩き出した。何処へゆくのであろうか。幸西と弁長とは左右からこの聖者をかばうようにしてゆく恰好に

なった。行空は一步おくれて背後から追尾してゆく。

「病むことも、また限りなく楽しいものだ」

左右どちらへともなく語りかけた。

「臥せられる日が多いようで」

と見舞う幸西を無視して、

「赤い袋のようなものが見えてきた。瑠璃の壺も見える。だが眼を開けば見え、閉じればかき消えた。ところが病いが重もって、熱が出てくると、目を閉じたままでもよく見えるのだ」

「それは……」

弁長の問いに、

「極楽浄土の莊嚴だ。病んで初めてはっきりと浄土が見えてきた」

「……」

弁長も幸西も声を吞んで、法然の顔をそむけた。不吉な予感が胸をかすめたからだ。法然はズバリ彼らのおもわくへ言葉を突き入れた。

「わたしに死が迫ったからと考えているのだらう。しかし、それは違う。わたしは未だ死なない。死の幻影のなかで見る浄土の莊嚴はほんものではない。同じ病んでい

ても、つねに生きようとする意慾のなかで……」

観想する浄土こそ真実のものだ、と法然は強調する。

「観無量寿経」の韋提希夫人が一度だって現実から逃避して死を讚美したであらうか。

法然は台地の端へ歩んでいった。

黄昏のなかに、京の街々がひろがる。

「見えるか、あの彼方が」

と指さしたのは西山の峯々、今や日没の寸前で、まばゆい残光が山頂を染めぬいていた。

「青色青光……光り輝く樹々が見えるか。これこそ極楽浄土の宝樹なのだ」

「観無量寿経」の十六観中にある宝樹観の実相を、法然はさながら眼前に展ずるが如く訴えてくるのであった。

幸西の感動は限りない深奥にまで泌みとおった。

これまで法然の像を、比叡山にひそむ紙魚か羅漢もどきの学匠たちと同一視してきたのである。それが、まるで異なっている。生々しい鮮明な血漿のなかで浄土相をとらえ、阿弥陀仏へのひたむきな敬慕信頼の情念をこめて称名念仏に励む人ではないか。

いや、すでに人間ではなかった。阿弥陀仏の慈悲を全

霊全身で撰出した菩薩の姿であった。

これは、幸西が「玄義分抄」に凝集しきった浄土一乗の理想像と寸分の隙間もなく密着している。

法本房行空の受け止め方は、この幸西の感動とはだいぶかけ離れていた。東山を辞して、京の街へ降りてゆく道すがら、行空は露骨に三昧発得の法然をあざ笑った。

「歳には勝てぬか。さすがの法然ご房も老いてボケられたな」

「ボケてはおらんだらう」

「いや、名もない雑木が極楽の宝樹に見えたりしてのう」

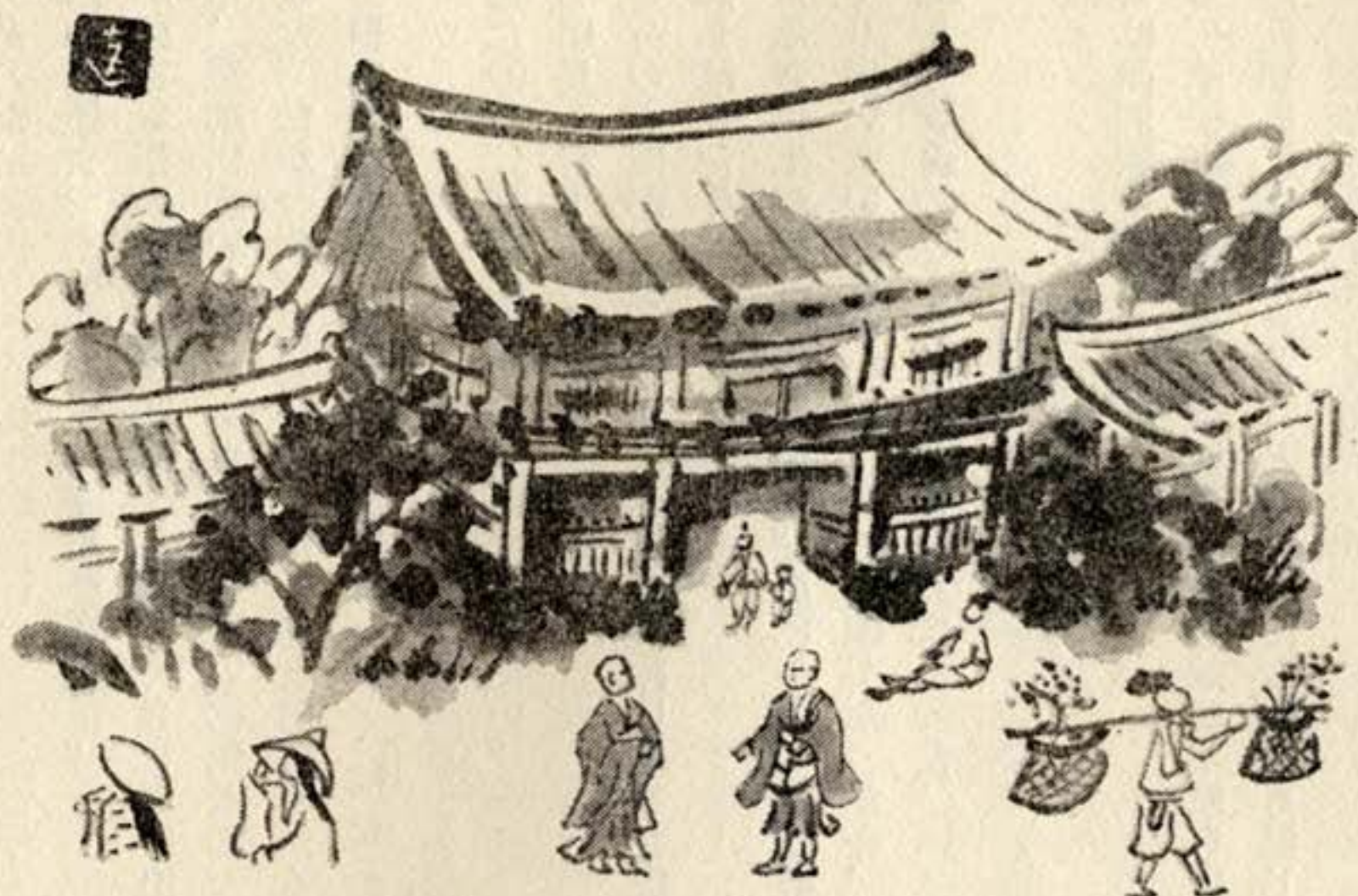
「死の幻影のなかで浄土を見たのではない、とはっきりおっしゃっている」

「去年までの法然ご房ではない。あれは老いと病悩のせいだ」

行空にしてみれば、大谷の禅室が接し馴れた法然のシヤープな印象を裏切られたらしい。瑠璃光だとか宝樹観想などを談論風発だった法然の口から聞かされると、ひどく低調に感ずるのであった。

「もっとも、老いてボケてしまった方が權威は高まる。」

＜祇園社の辻＞



鋭い利口な人間では感心はしても有難味は感ずるからのう」

行空はあくまでも法然の名望を利して、天下の念仏ひじりたちに号令を発し、巨大な信仰結社の実現を夢見ているようである。

多くの美点を有し、頭脳明晰な法本房行空だがこの野望癖だけは頂けぬ、と幸西は旧友を批判したかった。

「今夜はどうする？ 明日は早朝から高野へ参るぞ。七条河原へ来て泊るか」

行空は河原の庵室を一夜の宿に供そうと申し出る。京へ下った幸西は高尾の麓にある知己の寺を宿所としていたのだが、そこは今朝引き払ってしまったのだ。

明日は高野山だ。蓮華谷に俊乗房重源を訪問するのが彼らのスケジュールであった。念仏ひじりの大結集には、何としてもこの勧進上人の出馬を懇請しなければならぬ。

「いや、今夜は寄るところがある。明朝早くおぬしを訪ねることにする」

行空がうとましかった。法然をこのような印象でしか受け止められない小賢しい男から、一刻も早く離脱した

いのであった。

祇園社の辻まで来て、二人は左右へ別れた。

闇が深まる都大路へ幸西はあてどもなくさまよい出ていった。感動に酔いしれた身を、心地良い夜気にしっぽりとひたしたかった。なまじ知った人間と出会いたくはない。旧知の建物も、地名すら思い出したくはなかった。

幸福だった。夜空に向って大声で叫びたい。

わしは見たぞ！

生き身の人間が、生身のまままで菩薩になった実像を、わしは見たぞ。

僧たる者、生涯に一度でもいい。血流が通った仏菩薩にめぐり遇いたいではないか。その悲願がたった今、法然房という現身のなかに目撃し得たのであった。

三

そこは西洞院の裏通りであった。

かつては平家の武将たちの屋敷が建ち並び、彼らに仕える郎党相手に春をひさぐ女どもを抱えた娼家も混じりこんで、殷賑をきわめた街筋だった。

だが、現在むかしのただれた灯は消え落ちていた。

成覚房幸西が育った大納言経盛の屋敷もその一隅にあった。

あてどもなく彷徨した足が、この一隅に向けられたのも何やら因縁めいている。

と、幸西が気づいたのは、廃墟となった生家の跡に立ったときであった。

自己のきらびやかだった前半生は、このおい繁る雑草や狐狸の棲家に似た傾いた建物とともに崩壊し去った。

しかし、すべてを捨てて比叡に山居して、さらにそこすら捨て去って今日、聖者法然とめぐり遇えることが出来たのだ。

感動に酔いしれて、足のおもむくままにたどり来たった先が、生家の旧跡だったのであった。

幸西はひとしきり、廃墟のなかを歩きまわった。

傾いた建物に踏みこみ、雑草をかき分けてむかし池のあったあたりに立ってみた。

この池辺で、思い出はひとしお深かった。十歳になっていたであろうか。少年の前に、藤たけた一人の少女が立ち現れたのだ。年齢も彼よりは三つか四つ年上だった。

た。午後のひとときを、池辺で手鞠などをともに戯れたものだが、少女に強く魅かれた。

小松内府の息女。数年後に二人は正式に結ばれたのである。

子供までなしたあの妻は健在なのかどうか。健在だとしたら、何処でどんな暮しを……ようやく幸西の胸で、若き日への感傷がうるもった情液となって回流しはじめた。

この廃墟で、一夜を明かしてしまおうか。

池辺を離れ、いったん破れ門のあたりにまで戻ってみたときだ。そこに人影があつた。瘦身の若者が、門柱を背にして立っている。僧形であつた。

「幸西。幸西大徳ではありませんか」

どうやら早くから気づいていて、幸西の挙動を注視していたらしい。

「そうだが、おぬしは？」

「常行三昧堂で堂僧をつとめる者ですが、名乗るほどではありませんか。お声をかけることも……」

無名の堂僧で、南谷きつての名匠幸西大徳に面と向つて口をきくのさえ礼を失するのだが、と恐縮している。

「山の者が、こんな刻限にこんな場所で何をする？」

「堂僧奴、救い難き愚か者でございます。愚かだけではなく、慾深く、いぎたなく、耐えきれずに常行三昧堂を逃げ出してまいりました」

異常に自省力の強そうな男である。口のきき方にも特色があつた。

「女か」

「はい」

あつさりとうなずく。

「この近所にいるのか」

「頭ノ中条のつぶれ屋敷に住んでおります。四年越しで、何度か思い諦らめたのですが、修行に倦むと逢いとうて逢いとうて」

「それほど、いとしいか」

「やや児もおりますゆえ……」

天真爛漫に自分たちの情事を語る堂僧だった。

「こんな刻限に、何をしに戸外へ出て来たのか」

「山へ帰ろうと思ひまして。やや児をはさんで女と眠っていたのですが、ふと目がさめて……」

慾念に負けたいぎたない自己の姿をかえりみると、た

まらなくなった。こんなところで、こんなことをしていいてはならない。そつと女のかたわらを脱け出ると、深夜の往還へ。脱出してきた経緯を、堂僧は生き生きとした描写で物語る。

堂僧は、比叡山の峯々に散在する諸堂で堂守をする修行僧であつた。この男は常行三昧堂だというから不断念仏に明け暮れているのであろう。

身分も低いだけに格別な規制もない。勤務も自由で、街や里に妻子をたくわえていても不都合ではなかつた。責任のない職制で、いわば自発的に修法しているのであつた。

子供までなした妻、それも深く愛しているというのに、逢えば必ず自省におち入るこの堂僧はよほどおのれにきびしい男なのだ、と幸西は思った。

「おぬし、これから山へ帰るのか」

「はい」

「わしも帰ろうと思う。それと、常行三昧堂などへ戻らずに、わしの房へ来るがよい」

「南谷の鐘下房へ、ですか」

「じっくり法を説いて聞かせてやろう」

京の街へ下つて法然とめぐり遇つた。限りない法悦を体感した。幸西はこの感動を、もう一度比叡山へ戻つて、あの環境のなかで噛みしめてみたかつた。

明朝、高野山へ俊乗房重源を訪ねる行空との約束なぞ、けろりと忘れていた。

ところでこの年若い堂僧だが、後年になつて法然門下で重要な立場を持つ親鸞その人であつた。

この建久九年の時点、親鸞はまだ比叡山の常行三昧堂にいたわけであるが、二十年に及ぶ堂僧生活に行き詰まり、ひたむきに出離の想いに燃えていたはずである。

幸西との出会いが彼の進路に新生面を切りひらく。しかし決定的な転機となる法然と面受するまでには、なお一年有余の歳月を残している。

(つづく)

新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。お知り合いの人やお檀家の皆様に呼びかけて、一人でも多くの読者をご勧誘下さいますれば、幸いです。どうぞくれぐれも宜しくお願いします。

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○梅雨時のジトジトした湿気には、どんなに陽気な心をもってしても、まったく抗するすべがない。しかし、青草に青露のしたり、水濡れる季節の風情はまた、積もり積もった心の塵埃を洗い流すような働きもある。

六月の花のさざめく水の上

龍太

響きこもる六月の雲水の上

節子

○「日の要求を義務として、それを果たして行く」とはゲーテの言葉であるが、追われるように日々のなりわいの慌ただしさを消化しながら、今年もはや六カ月が過ぎてしまったかという感慨はひとり私だけのものではなからう。「今日の仕事を精一杯にし、明日のことを思いわずらうな」といわれても、やはり昨日の失敗が悔やまれ、今日の仕事に怠け、明日の不安に悩み苦しんでしまう。愚かにして、弱きもの——それは私……。しかしながら、「愚癡の凡夫」

と自覚するには、まだまだ果て遠き道のみである。

橋は他人のためにある

橋は自分を渡らない

渡った者は思はない

下には水が流れてる

流れた水はかへらない

(堀口大学「橋」より)

これは、有名なアポリネールの「ミラボー橋」を訳した詩人が、その詩心をみずからの心深く昇華して歌った言葉。あてどなく、揺れ動く人間を、そして人生を、「橋」に象徴して凝視した詩人の想い。

○ところで詩人の吉水まさみさんの「石の塔」と「白い月」の二つの詩が、野村嘉明さんの作曲を得て、このたび八音のメルヘン屋Ⅱ渋谷区千駄ヶ谷五——十Vからレコード化された。やさしい愛の世界が、静かな美しいメロディに乗って紹介されることになった。こうした小さな営みに、多くの人が関心をもっていただければ幸いである。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四卷

六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十三年五月二十五日 印刷

昭和五十三年六月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一——十一——六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

＝新刊＝

『經典の知識 100』 須藤 隆仙 著

B 5 判 241 頁 定価 1300 円 (送料実費)

◎仏教經典の基礎的な知識を 100 の項目に整理して平易に説き明かした仏教入門書。豊富な用例とやさしい解説が、多様多量な經典とその難解な教えをよく解きほぐしてくれる好便の新書。

発行 新人物往来社

取扱 教学研究会

〒 040

函館市船見町18-14

振替 (函館) 5591

■極楽往生を願う念仏者たちの記録■

『近世往生伝集成』 全三卷

笠原 一男 編

A 5 判箱入 平均 580 頁

第 1 卷定価 6200 円

◎江戸時代近世の庶民信仰の側面を、現存する史料を集成した往生伝の全容を呈示することによって説き明かそうとする画期的な企画。文部省の助成を受けて近世の諸往生伝がはじめて整理されることになったのである。皆様の購読を是非おすすめしたい。

発行 山川出版社

〒 101

東京都千代田区内神田 1-13-13

振 替 (東京) 2-43993